

令和7年度  
桑折町小・中学生  
意見発表文集



桑折町青少年育成町民会議



# はじめに

今年度も各小学校では「学習発表会」に、中学校では「少年の主張福島県大会」に向け、意見発表に取り組んでいただきました。これらは、人格が形成されるうえで重要な時期にある児童生徒が、日常生活の中で考えていること、感じていることなどを文章にして発表することにより、自らが社会の一員としての自覚を高めるとともに、町民の方々にも、青少年への理解と健全育成への関心をより一層深めていただくことを目的としております。

小学生の意見発表では、広島平和記念式典派遣事業へ参加した五名の児童が、平和の尊さ、ピースメツセンジャーとしての役割など、派遣事業で感じた想いを発表しました。自分の考えを堂々と発表する姿は、多くの聴衆に深い感動と感銘を与えるものでした。また、中学生の少年の主張では、家庭や学校、地域活動を通して得た貴重な体験から、これからの自分の生き方について真剣に向き合い、そこから得られた感動や夢、希望や未来への提言などが語られ、その強い想いが伝わってくるものでした。

この度、子どもたちの作品を一冊にまとめた文集を発行いたします。多くの方々にお読みいただき、健やかな青少年の活動推進のための一助としていただければ幸いです。

次代の担い手となる青少年の豊かな資質と可能性を信じてとともに、その「生きる力」を養い、誇りを持って明るい未来を築くことが出来るよう、家庭・学校・地域が一体となって青少年の健全育成活動に取り組む必要があります。親はもちろん、地域の大人が模範となり、地域社会の環境整備を図りながら進めて行かなければならないものと考えておりますので、今後とも、皆様方のお力添えを切に願うものであります。

令和八年二月

桑折町青少年育成町民会議 会長 高橋 宣博

# もくじ

平和学習に参加して	醸芳小	六年	伊藤	悠 <sub>はる</sub> 磨 <sub>ま</sub>	1
広島へ行き学んだこと	醸芳小	六年	山木	涉 <sub>わたる</sub>	3
平和な世界へ	睦合小	六年	佐藤	凜 <sub>りん</sub>	5
平和の尊さ	伊達崎小	六年	石幡	心 <sub>こ</sub> 美 <sub>こみ</sub>	7
広島平和学習に参加して	半田醸芳小	六年	佐藤	月 <sub>つき</sub> 緋 <sub>ひ</sub>	10
好きを認め合う社会へ	醸芳中	二年	菊地	優 <sub>ゆう</sub> 那 <sub>な</sub>	14
人生という名の舞台	醸芳中	三年	浅野	百 <sub>も</sub> 香 <sub>もか</sub>	17
取るにたらないリーダー論	醸芳中	三年	山室	榛 <sub>はる</sub> 真 <sub>ま</sub>	19

# 平和学習に参加して

醸芳小 六年 伊藤 悠磨 はるま

平和学習に参加して、ぼくは心に残ったことが二つあります。

一つ目は、平和記念資料館です。ぼくは、原爆の恐ろしさや悲惨さを知りませんでした。資料館に入ると、ボロボロになった服や焦げた三輪車、そしてグニャグニャになった弁当箱がありました。それを見て、原爆はこんなにも恐ろしく悲惨なのだとわかりました。

原爆が落ちた時の実話を本で読んだ時には、熱風で多くの人が大やけどを負い、命を落としている

ったことを知り、胸が痛くなりました。また、水を欲しがっていた被爆者のことも知り、それだけ熱風の熱さは計り知れないのだと感じました。

二つ目は、被爆体験者の話です。平和式典が終わり、子ども平和サミットで被爆体験者の話を聞きました。その話の中で印象的だったことは、被爆体験者の方が当時六才で、高校生のお姉さんと一緒に被爆をした時の話です。

玄関で掃除をしていると、突然空が光り、一、二秒後ぐらいに爆発したそうです。そして、その方はがれきに挟まってしまいましたが、何とか抜け出すことができたそうです。そして、それから見た、人がゾロゾロと列になりながら逃げている光

景に衝撃を受けたそうです。その中に被爆体験者  
さんも入り、無我夢中で逃げていたそうです。爆  
弾がたくさん落とされた訳でもないのに、なぜこ  
れほど広島が粉砕されているのか、そしてこれが  
「原子爆弾」という事は、日本の誰にも分からな  
かったそうです。

僕は平和学習で戦争の悲惨さや人々の苦しみを  
知り、二度と戦争を起こしてはいけないという思  
いが強くなりました。そして広島で起こったこと  
は、何十年、何百年と語り継がれなければならな  
いと思います。そしてぼくも、どうやったら平和  
な世界になるか自分なりに考え、周りの人にも伝  
えていきたいです。



# 広島へ行き学んだこと

醸芳小 六年 山木 渉

わたる

ぼくは平和学習派遣事業に参加し、原爆の恐ろしさと、広島の方々が家族を失った悲しみから、どのような思いで生きてきたのかを見学したり、実際にお話を聞かせていただいたりしました。この経験から、自分たちにできることを考えました。

八十年前の八月六日、広島市に原子爆弾が落とされました。第二次世界大戦の終結を早めるためにという理由だったのですが、軍事拠点となっていた広島に原子爆弾が落とされました。原子爆弾はとても強い爆風と熱、放射線で一瞬にして町

や人が焼け、桑折町の人口の約十四倍の十四万人の人が亡くなったそうです。原爆資料館では、爆風や熱で溶けた三輪車や、目の周りの皮ふが焼けただれた男の子の写真が展示されていました。また、生き残ったとしても、放射線の影響が長く続く恐ろしさも知りました。

ぼくは、国同士の戦争で、普通の人々が普通の生活をしている中、突然原爆によって戦争の犠牲者になったという事実を知り、戦争がとても恐ろしくなりました。

ぼくが一番印象に残ったことは、平和サミットでの国連事務次長の中満泉さんのお話です。戦争が起る要因の一つは、フラストレーションが

たまることだと知りました。フラストレーションとは、目標や欲求が何らかの原因によって阻止されて満たされない状態、またはその結果生じる不快感のことです。国という大きな所で起きれば戦争となり、自分たちの身近な所で起きればいじめなどにつながります。

ぼくは、戦争を起こさないために、自分の生活でできることがあると知りました。それは、一人が不平等に目を向けることです。簡単なようで、とても難しいことです。しかし、ぼくはこれを実践することで、自分たちにもできることがあると伝えたいです。



## 平和な世界へ

睦合小 六年 佐藤 凜<sup>りん</sup>

令和七年八月六日八時十五分、平和記念式典に参加した私は、広島で静かに目を閉じ、平和の祈りを捧げていました。平和サミットで最も心に残っているのは、被爆した方の家族の体験談でした。爆風により一瞬で倒壊した家、五十ものガラス片が刺さって血だらけの状態で見えた母、思わず耳をふさぎたくなるような数々の恐ろしい実話は、原爆の恐ろしさを私に伝えるのに十分でした。

平和記念資料館の展示資料には、体と心が壊さ

れた辛さ、まだ死にたくないという叫び、そして、自分の子供や家族を助けられなかったという後悔や悲しみの声であふれていました。見ただけの私でさえ怖くてたまらないのに、当時を生きた人々は、私が感じた何百倍もの恐怖を感じ、たえがたい心と体の痛みと戦っていたんだろうなと思いました。

広島平和記念資料館で最も驚いたことは、原爆投下後の歴史です。これまで、核兵器禁止条約の発効など、核兵器廃絶に向けた努力がされてきました。しかし、現実には核保有国は増加し、核兵器のリスクが高まっているそうです。核兵器廃絶を達成するためには、まだまだ難しい課題がある

のだと分かりました。

私は、この広島を訪れた三日間でたくさんのことを見聞きし、大切なことを心で感じる事ができました。広島に行く前は、八十年前にあんな悲惨な出来事があったとは実感できなかったし、考えもしませんでした。現在の広島には、悲惨な過去の出来事を忘れてしまうほど素晴らしい景色が広がっています。これから長い年月が流れれば、戦争や被爆を経験した人はいなくなってしまうのではないでしょうか。だからこそ、これからを生きる私たちには、「伝え続ける」という大切な役割があるのだと思います。私はこれから、八十年前に起きた悲劇を自分ごととして考え、自分がどのように生

き、未来をどう創っていくべきかを真剣に考えていきたいです。



## 平和の尊さ

伊達崎小 六年 石幡 心美

ここみ

私は、五年生の国語の授業で、「たずねびと」と

いう話を読んで、戦争や原子爆弾、平和について考えることに興味をもちました。また、今年は社会の授業で「平和主義」について学んだ時に、戦争でたくさんの方が亡くなり、日本は戦争をしないと世界に宣言したことを知りました。他にも、映画や本で戦争や平和について見たり聞いたりすることがありました。

しかし、当時のことは想像することしかできません。なぜ戦争をしなければならなかったのか、

どうして原子爆弾が落とされたのか。今の平和な日本を取り戻すまでにどのようなことがあったのか……。知りたいことがたくさんあったので、私は桑折町の平和学習派遣事業に参加しました。

実際に広島を訪れて、分かったことがたくさんあります。みなさんは「黒い雨」を知っていますか。これは一九四五年八月六日、広島に原子爆弾が落とされた後に降った雨のことです。町中が一度に燃え、たくさんの方のけむりやすすが、空にのぼりました。そこに水分が混じって、黒くてねばねばした雨になったのです。だから「黒い雨」と呼ばれました。

また、この雨にはたくさんの方の放射性物質が含ま

れていました。そのため、雨を浴びたり、水を飲んだりした人の中には、体の調子が悪くなる人もいたのです。

黒い雨は、原子爆弾の怖さと戦争の悲しさを伝える出来事の一つです。私は、このことを今回、広島に行つて初めて知りました。その衝撃は、言葉になりませんでした。そして同時に、「なぜ知らなかったのだろう。」「もっと学ぶべきだ。」そう思ったのです。もっと知りたいという気持ちが、広島へ行く前よりも大きくなりました。

「周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。」

これは、広島平和記念式典の中で、私たちと同じ小学校六年生の子ども代表が話した言葉です。

私は、この言葉が今でも心に響いています。平和学習派遣事業に参加して、絶対に戦争はしてはいけないと一層強く思うようになりました。また、今こうして、家族や友達と当たり前に過ごしている毎日の幸せについて考えることができました。

広島での三日間は、自分の目で見て、耳で聞いて、戦争の悲惨さや平和の大切さについてよく考えた三日間でした。中でも、広島平和記念資料館の展示は、目をそむけたくなくなるほど恐ろしく、悲惨な原爆の事実をつきつけられ、胸が苦しくなりました。

原爆症で苦しんだ佐々木禎子さんが、平和を願って折った折り鶴や真っ黒に焼けた三輪車、ボロボロに破れた服。被害を受けた方々や町の様子を

写した写真もありました。原子爆弾が落ちた辺り一帯は焼け野原。人間の皮膚はドロドロに溶け、はがれ落ち、誰なのかさえ分からなかったそうです。

残っている貴重な資料の数々を目にして、原爆のせいで一瞬にして変わり果てた広島で、夢や希望を絶たれてしまった人がいることはまぎれもない事実であることを知り、改めて戦争は絶対にしてはいけないことだと思いました。

他にも、教科書に出てくるような厳島神社や広島城を見学したこと、有名な広島お好み焼きを食

べたこと、他の学校に新しい友達ができたことなど、たくさん思い出ができました。

これから私は、平和のために行動すると決めました。相手への思いやりの気持ちをもって行動したり、平和がどんなにすばらしいことか、私の言葉で伝えたりします。

今年で戦争から八十年を迎えたそうです。戦争を経験した人も少なくなってきました。だからこそ、私は今回の貴重な経験を忘れず、自分の目で見て、肌で感じた平和の尊さを一人でも多くの人に伝えていく存在になりたいです。私の一歩が未来へつながると信じて。

# 広島平和学習に参加して

半田醸芳小 六年

佐藤 月つき緋ひ

私は、国語の学習で戦争の話を学習し、社会科で平和主義を知ったことで戦争について考え、もつとよく知るべきだと思いました。そして、なぜ原爆が落とされてしまったのかという疑問をもち、この答えを見つけるために、広島平和学習に参加しました。

一日目は、原爆の子の像へ行きました。そして、桑折町の小学六年生が協力して折った千羽鶴を納めました。そこには、平和の鐘があり、その鐘を鳴らすために、たくさんの人が集まっていました。

その後、平和記念資料館へ行きました。そこには、次のような言葉がありました。

「一発の原子爆弾が、無差別に多くの命を奪い、生き残った人々の人生も変えました。広島記念資料館は、被爆資料や遺品、証言などを通じて、世界の人々に核兵器の恐怖や非人道性を伝え、ノーモア・ヒロシマと訴えます。」

資料館の奥には、原爆が落とされる前と後に書いて書いてある資料がありました。それは、とても悲惨な状況で、原爆が落とされた時の時間が資料館にとどまっているようでした。たくさんの方が亡くなり、たくさんの方が燃え、所々に炎が上がっていました。体中にひどいやけどや深い傷を

負っている人もいました。そして、原爆が落とされた日が、一九四五年八月六日八時一五分だと知りました。そして、その日からカウントされている時計がありました。私が資料館に行った日は、原爆が落とされた日から二万九千二百十九日でした。そして、最後の核実験の日からは、四百四十八日でした。私は、核実験が最近まで行われていることに驚きました。これからも、この日にちが伸び続け、平和な世界になるといいと思いました。別の部屋には、外国から来た方々が残したメッセージが書かれていました。その中には、「悲しみが私の胸を締め付けます。どんな場所であれどんな時であれ、このようなことを二度と繰り返さな

いように全力を尽くすことを、私たち皆が誓わなければいけません。」という言葉がありました。私は、核兵器をなくそうと思っっているのは日本人だけではないと分かり、安心しました。そして、安心するだけではなく、私も何か出来ることを考え、少しでも実行しようと思いました。

二日目は、平和記念式典に参加しました。広島県の小学校児童代表の二人が平和の誓いを発表していました。その中で、私が特に共感した言葉を紹介します。

「たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。大人だけではなく、子どもである私たちも

平和のために行動することができます。あの日の出来事を、広島を歴史を、二度と繰り返さないために、私たちが被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声も紡ぎながら、平和を作り上げていきたいです。」というところです。

しかし、この式典をしているときに、このような意見に反対の考えをもつ人たちもまた、自分の意見を式典の外で訴えていました。私は、どちらが正しいか分かりませんが、この二つの違う考えをもつ人たちが歩み寄れたとき、平和の心が広く伝えられるのだと思いました。

平和記念式典が終わった後、被爆者の方から被爆体験を聞くために、第一回全国子ども平和サミ

ットに参加しました。その方は、当時子どもで、玄関の掃除をしていた時に、空が急にまぶしいほどに光ったとおっしゃっていました。ピカッと光った後に、ドーンという激しい音とともに強風が吹いたそうです。木でできた建物などにいた場合に助かる確率が高く、被爆者の方は、玄関にいて、そこは木でできていたので助かったそうです。そして、キノコ雲が発生し、黒い雨が降ってきました。人々は、雨でのどをうるおそうと考えたそうですが、その雨には放射性物質が混じっていたので、その雨を飲んだ人は死んでしまったそうです。

私は、戦争の恐ろしさを感じました。

今回の学習で、このような恐ろしい原爆が、広

島に落とされた理由は、広島には狙いやすい橋があり、戦争のための船を造る工場があったからだと知りました。そして、戦争の恐ろしさを知りました。今でも世界には、戦争や紛争が続けているところがあります。しかし、平和を願う人たちも世界中にいます。私は、戦争を経験していませんが、平和を願う一人として、どんな理由があっても戦争はいけないという気持ちを受け継いで、語り継いでいきたいです。



## 好きを認め合う社会へ

醸芳中 二年 菊地 優那 ゆうな

みなさんには好きなことはありませんか。そして、自分の好きなことを否定されたり、隠したりした経験はありますか。好きなことを否定されると心がとても傷つき、何年経っても覚えておくこともあるかもしれません。

私にもとても好きな作品があるのですが、それを「下手」や「つまらない」と否定され、ショックを受けたことがあります。私は、どうしてもそんなことを言えるのか悲しくて悔しくてたまりませんでした。

ささいなきっかけだと思うかもしれませんが、私はこのことがあってから、なぜ人は何かを否定してしまうのだろうと考えました。

そして私はこう結論づけました。人は自分を他人と違う特別な存在だと思いたいのではないか。だから、自分は特別だと証明できる根拠がほしいために何かを否定するのではないかと。

私は、何かを否定して優越感に浸る生き方をしているのは、本当の幸せは手に入らないと思います。では、どういう考えを持ってほしいのでしょうか。私は、「人間は一人一人価値観が違う。全く同じ人間はいない。」ということを改めて考えました。「相手の立場に立って考える」という言葉があります

が、そんなのは当たり前だとわかっている、実際にできていなければ意味がありません。みなさんも、あらためてこの言葉の意味を考えてみてください。それが当たり前前にできれば、きっと人生は豊かになると思います。

さらに、人は多くの人が好きになるものを好きになり、好きと思う人が少ないものを否定する傾向があると考えました。例えば、ほ乳類と虫です。ほ乳類は人間が好む形をしているものが多く、好きな人が多い印象を受けます。一方、虫は、ほ乳類とは違う見た目もあってか、苦手や嫌だという人が多いという印象を受けます。そして、よく虫好きな人が否定される場面を見ます。しかし、虫

の魅力に気づいている人は、自分の周りには少ないだけで世界中にはたくさんいます。そして、虫の魅力に気づいている人は、そうでない人より、きっと人生が豊かになっていると私は感じます。

否定する人は、周りとは合わせないと「はぶかれしてしまう」「嫌われてしまう」と心の底でおびえていて、周りに自分も同じだとアピールするために否定しているのかもしれない。でも、否定された人はどう思うでしょう。みなさんも自分が好きなものを否定されたら、どういう気持ちになりますか。否定しても、よいものは生まれません。

みんなが幸せに生きるために、まずできることは、自分と違う価値観を持っていても否定せず、

理解しようとするのだと思います。この当たり前ができるようになれば、今、世界のあちこちで起きている争いはもつと少なくなるはずです。

の人もきつとあなたを受け入れてくれるでしょう。私は、自分が知らないものを最初から否定せず、理解しようとして努力していきます。

当たり前は、簡単そうで難しいものです。でも、みんなが「当たり前」をできるようになれば、人間は今よりもつと明るい未来を進めるはずです。

もし、あなたが誰かに自分の好きなことを否定されても、その好きなことをあきらめないでください。自分と同じことが好きという人が周りにいなかったら、世界に目を向けてみてください。きつと好きなことが同じ人はいます。そして、自分が否定されても、周りの好きを否定しないでください。あなたが受け入れることができたなら、周り

# 人生という名の舞台

醸芳中 三年 浅野 百香<sup>ももか</sup>

みなさんは人生の中で、他人の人生を羨ましく思ったことはありませんか。私は数えきれないほど沢山あります。例えば、少ししか勉強しなくても成績が優秀な人、文武両道に物事をこなすことができる人、家が裕福な人など、自分に足りない物を持っている人を見ると、自分には何の取り柄もないように感じて羨ましく思ってしまう。

そこで私は、「人生」は舞台であり、その舞台の主人公は自分自身であると考えました。つまり、その「人生」という名の舞台の台本はすでに決まっているため、この先の人生も決まっているとい

うことです。「この先の人生は決まっている」と聞くと「人生が決まっているのなら、これから努力する必要はないのではないか」「人生の出来事は決まっているからという理由で人生を諦めているのではないか」という意見も出てくると思いますが、私は努力をして良い結果が出たり、悪い結果が出たりすること、立ち向かわなければならぬ困難も、回避することはできなくて、良い意味で全て決まっていると思います。この考えの根拠はなく、ありきたりな話だと思われるかもしれませんが、少なからずこのように考えると、努力をしたのに結果がでなかった時、自分の選択を後悔している時などに、必ず自分の味方になってくれると思います。

私は自分の選択を後悔してしまったことがあります。私は小学六年生まで北海道に住んでいて、中学校進学タイミングに、父親の実家であるこの町に父と引っ越してきました。これは、自分が勉強に励むための環境として最適な選択だと思い、自分でした決断でしたが、なれない土地や友好関係が一切ない状態での生活は、想像よりも甘くありませんでした。学校では周り温度差を感じてしまったり、家族関係も上手くいかなくなってきました。しまったりと、以前の生活の方が魅力を感じてしまい、中々人には言えませんが、「こんな選択しなければよかったな」と自分の選択を後悔していました。しかし、自分がこのような選択をすることは決まっています、このような人生を歩んでいく

ことは決まっていたんだと考えると、だんだん自分のした選択と向き合えるようになってきて、今できることを精いっぱい頑張ろうと思えるようになりしました。この選択をしなければ得られなかったことも沢山あると思います。今ではこの選択を後悔していません。また、誰に対しても言えることですが、自分の人生の中での楽しかった経験、辛かった経験なども、自分にしか経験できなくて、務まらない人生という名の舞台の役だと思っています。そんな大役の結末をハッピーエンドで終わらせられるように、辛いことがあっても乗り越え、努力を惜しまないで、これからの人生を歩んでいきたいです。

# 取るにたらないリーダー論

醸芳中 三年 山室 榛真

はるま

「ピー、ピー、ピーツ。」

グラウンドにホイッスルの音が鳴り響いた。試

合終了。○対六。僕の三年間続けたサッカー部は、

あっけなく終わった。一緒に戦ってきた仲間は、

悔しそうな顔、いつもと変わらず楽しそうな顔、

二年生は少し申し訳なさそうにして、そんないろ

いろな気持ちで混ざり合っていた気がする。その

時、僕が思っていたのは「勝ちたかった」だった。

僕は、去年の夏から部長になり、一年を過ごした。

果たして、サッカー部をまとめることはできたの

だろうか、勝つためには、どうすればよかったの  
だろうか。そんな気持ちが、全て終わってから湧  
き上がってきた。

部長を引き継いだのは、僕たちの上の先輩たち  
が推薦してくれたからだ。その時から、うれしい  
気持ちやワクワク感より不安の方が大きかった。

同じ学年のチームメイトは、みんなサッカーの経  
験はほとんどなく、まずは仲良く、楽しくやろう  
ということを考えていた。チームは上の三年生が  
抜けて、十二人。部活をやめる人がいたら、チー  
ムにならないことも頭にあった。でも、そんな中  
でも意見が割れることがよくあった。体を強くす  
るために筋トレを取り入れるべきか、走りきるた

めに持久力をつけるべきか。シュートの練習を多くするか、ドリブルの練習を多くするか。そんな意見の違いは、常にあった。僕は、自分の考えはありつつも、まずは両方の意見を聞くように心がけた。聞いた上で自分の考えも伝え、みんなで納得できる方法を話し合った。僕自身、自分の独断で練習を進めたこともあったが、その時は雰囲気も悪く、やる気もないように感じた経験をしたことから、工夫してきたことである。しかし、チームは段々と勝てなくなってきた気もした。

僕たちの一つ上、二つ上の部長は、強くなることをもって考えていた気がする。試合中に強く指示を出す先輩もいて「失敗したらどうしよう」と

考えることもあったが、それなりに勝ったり、負けたりがあつて楽しかった。上の代の部長は、たくさんサッカーの経験があり、いつも大きな声でみんなを盛り上げてくれた。そして、明るく、優しかった。他の三年生は、強くなろうと考えて部活とは別に練習に誘ってくれたこともあった。それぞれの考え方や立場が違つても、チームとして強くなるための方法を考えてくれていたように感じる。

それに対して、僕たちのチームは上手くなりた  
い人、仲良くなりた  
い人、サッカーを  
楽しみたい人、サ  
ッカーをやつて  
みたい人と、色  
々な考えが混  
ざり合つていた。  
その先に、チ  
ームとして勝  
ち

たいという思いはあっても、目的は少しずつ違うんだなと常に感じていた。部長として、もう少し頑張るべきだったのは、みんなの目標を一つにまとめることだったのではないかと、今は思っている。

僕が、一年間サッカー部の部長を経験して得たのは、違う考えの人が一緒にがんばるためには「自分の考えを持つこと」「ほかの意見もきちんと聞くこと」そして、「みんなの目標を一つに導くこと」この三点である。

僕は将来、学校の先生になりたいと考えている。自分のクラスを見ても、一人ひとり考えが違っている。そんなクラスをまとめていくために、この

経験は必ず生きると考えている。自分の考えだけで授業やクラスを引っ張っていくのではなく、自分のぶれない考えをもちつつも、生徒の気持ちや考えに寄り添って聴くことが大切だと思っている。

そして、三十人のクラスなら三十人が、納得できる目標をきちんと立て、一人ひとりがそれに向かうことができるように、支えてあげられるようになりたい。一人ひとりが成長することができる、みんなで力を合わせて目標を達成できる、そんなクラスが作れる先生を、僕は目指そうと思う。

伸びよう 伸ばそう 青少年



生かそう、きずな。未来のために！

令和7年度桑折町小・中学生意見発表文集

令和8年2月

桑折町青少年育成町民会議

〒969-1653 伊達郡桑折町大字谷地字道下 22-7

桑折町教育文化課内

TEL : 024-582-2403

Email : kyoiku@town.koori.fukushima.jp